



昨年、会社設立三十周年を迎えたこともあって、過去を振り返り、未来を考えると、うけがうけてしまった。

この五年間ほどの二十一世紀は、確かに大きく変化しているように見える。しかし、1984年の弊社十周年の記念誌に「世紀末を迎えた今日、産業革命以来の変革期という認識の下、学際的な「知」のフロンティアを結集し、新しい方法論の展開につとめる」と私が三十五歳の時に記している。

なんだこれは。現在の心境とあまり変わりがいいではないか。大胆な仮説を述べよう。

現在は、この三十年程前から始まった情報革命、あるいは感性革命社会の立上り期の最終段階にきている。あと五年か十年くらいで完全にステージが上がる。これは少なくとも百年以上続くだろう。

わが国の人口減少を問題とする向きが多いのだが、私は全く気にしていない。なぜなら、これからの社会は感性が生産や経済を規定するからである。つまり、生産年齢人口が減るといつている時の「生産」と、これからの「生産」のカタチが大きく変わると思われるからだ。感性社会は究極の個人社会であり、「その時、その人に、それだけ」のための消費を提供する産業が求められるのであり、モノやシステム、エネルギー等は全て個人の感覚、つまり「良かった。いい気分」といった結果に対する道具に過ぎないものとなっていく。カッコ良さの国民総生産として登場したGNC（グロス・ナショナル・クール）に即して言えば、GNH（幸せの総生産）こそが問われる時代を迎えるのである。パラサイトシングルやNAET（働かず就労訓練も受けない若者）の連中も自らの置かれた環境が変われば、しなやかに対応する。否、彼らがむしろ社会を変えていくかもしれない。もちろん、団塊の高齢者は、それ以上に重要な役割を担うこととなる。

さて、弊社のことだが、三十周年の記念イベントで水都大阪や街なか再生を論じたが、それが今、大きく動き出している。昨年復帰したM取締役も子育てと両立した研究者として軌道に乗りつつあり、これからのポスト三十周年は私たちもそれなりの「幸せ」を追求しつつ、社会に貢献していきたいと考えている。今後ともよろしく御指導御鞭撻下さいますようお願い申し上げます。

平成十七年 元旦
DAN計画研究所 代表取締役社長

吉野 園子

VOL.
16

JANUARY 2005